

## 講座 「所沢の魅力、再発見」①

2022年11月16日

記 三島昭雄

開催日時	2022年11月10日(木) 13:10~14:50
会 場	中央公民館 8, 9室
講 師	文化財保存全国協議会会員 門内政広氏 (ところざわ倶楽部特別会員 市民大学 所沢の歴史担当)
テ ー マ	所沢の魅力再発見① 「古道からみるいにしへの所沢」
参 加 者	29名

東山道武蔵路(とうさんどうむさしみち)、「鎌倉街道」、「江戸道」などの所沢の道を通っていた古道に着目しながら所沢の魅力を再発見する。その前座として古代の居住環境に関して、丘陵の下の水の湧き出る地域、ハケという立地条件をいかした生活が営まれていたことが示された。丘陵地や低い山地を形成する谷あいや谷戸または谷地と呼ばれ、湧水を利用した水田耕作の痕跡が認められている。狭山丘陵に属する日向遺跡やお伊勢山遺跡にそうした状況が確認できる。この遺跡調査の結果、丘陵の比較的高い地域に古代集落、丘を降った生活しやすい農耕地近くに中世の屋敷跡が発見され、時代が移るとともに丘から谷戸に移動したことが確認されている。

東山道武蔵道の駅家跡ではないかとの説のある南陵中学校地区を含む東の上遺跡は地形上、ハケと丘陵の様相をもつ遺跡である。中世の鎌倉街道付近の中世の「境堀」と武士の館の位置関係に椿峰遺跡群の事例で解説された。

## 東山道武蔵道

大宝律令(701年)によって、律令体制が本格的に始動し、行政単位として、全国を「五畿(ごき)一山城・大和・摂津・河内・和泉」と「七道(しちどう)一東海道・東山(とうさん)道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海(さいかい)一」に区分された。

全国は、五畿・七道のもとに、さらに、国・郡・里に行政区分された。全国は約60の国に分けられ、国の政務を司る所が「国衙(こくが)」とされた。当初、武蔵国は東山道に属していた(771年に武蔵国は東海道に配置変え)。畿内の都から全国に向けて、国道が整備されたが、その道も「七道」と同じ名前が付けられた。

東山道武蔵路(とうさんどうむさしみち)は基本的には道幅は12メートルで両側に側溝を持つ直線道路であった。上野国(現在の群馬県)から武蔵国の国衙に向けて整備された道路である。大宝律令制定時には全国の道路網は完成している。国分寺市の武蔵国分寺跡北方の武蔵道、その北に向かって直線延長上にある東の上遺跡で発見された武蔵道は全国的にも知られている。

道路には約16kmごとに「駅家（うまや）が設けられた。駅家は馬の手当てや宿泊などを目的として置かれ、建物、馬、馬の飼養や駅の運営を行う人的集団が散在した。10世紀初めの「延喜式」には全国402か所の駅家があったと記されているが、駅路の変更や廃止などなくなった駅家も存在した。

南中学校校庭で見つかった東山武蔵道は武蔵国府から丁度16キロの駅家説もあり、総延長93メートルで、東側と西側に側溝をもっており、東西側溝の中心距と離は12メートルで、その中央約3から4メートルの範囲が人や馬が通ったと思われる堅く締った硬化面が検出された。12メートル幅は現在の四車線道路程度に相当する広さである。側溝の場所からは裏に馬の絵を描いた漆紙文書が見つまっている。なお漆は土壌中では長期間、和紙の腐敗を防ぐ効果があり、馬の絵の発見につながった。また、東の上遺跡で検出された道の側溝から須恵器杯が出土されているが、大宝律令より20年前ごろに祭祀のため埋められたと推定されている。

地図の上で国分寺の武蔵道と東の上遺跡上の武蔵道を結ぶ直線上にある八国山は貫いたか、迂回か定かでない。八国山にある將軍塚には当時、狼煙台が設けられていた痕跡がある。

また、この道は武蔵国が東山道に属していたため、上野へ至る東山道から武蔵国府までを繋げた支路に相当する。

### 鎌倉街道

鎌倉街道とは、鎌倉時代、鎌倉と各地を結んだ道路の総称を言う。鎌倉街道は上道—3本の道筋—で所沢市内の鎌倉街道上道の主な道筋は入間川道、堀兼道、小手指道の3本で、仮称。入間川道は群馬県高崎市方面から来て、狭山市入間川を経て市域の中央部を通る道筋で、上道の本道である。堀兼道は群馬県太田市、栃木県足利市方面から来て坂戸を経て、狭山市堀兼を経る支道、小手指道は入間市方面から来て市域の中西部を通る支道となる。中世の所沢は鎌倉街道が縦断しており、下富地区でもその痕跡がある。

新田荘と鎌倉を結ぶ街道のほぼ中間点が元弘の新田軍と鎌倉勢の戦いの舞台、小手指が原や久米川の古戦場となった。なお東村山市徳蔵寺に寄進された元弘の板碑には街道上の戦死者を弔うことの多かった時宗の僧 久米の長久寺を開いた玖阿弥陀仏の僧の銘が刻んである。

### 江戸道

江戸時代には秩父に産する石灰を運ぶための秩父往還の道が発達した。所沢は馬次の宿として、往来が発達していた。江戸時代は東山道武蔵道を除いて、既存の鎌倉街道やその他の街道はそのまま使われて、多くの街道が交錯する市場の好条件をそなえていたので周辺地域の中継地として市の町となる。市場として富を蓄え、豪商が火災から財産を守る蔵造りの町並みとして発達していった。川越藩が城下町割りで武士と商人、町人の住みわけがきまり、その商人町に蔵造りができたのとは対照的な自然発生的に人の行き交う市街に蔵造り通りができたのが所沢といえる。

### その他

所沢市内には、柳瀬川、東川、砂川堀などの河川沿い狭山丘陵周辺から165箇所の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が確認されており、砂川遺跡、膳棚東遺跡、東の上遺跡、日向遺蹟など76箇所で発掘調査がされた。また、市内には、薬王寺を始め、沢山の神社、仏閣が存在している。

多くの実践活動を経た当会であるが、歴史の見方・考え方を養える今回のような講義は改めて基本の大事さを痛感するものであった。



2022.11.10 中央公民館 8・9号学習室にて

担当 Bグループ 三島昭雄、佐野弘太郎 担当協力 小川